人材と予算確保に苦慮

1984年、日本DNAデータバンク（DDBJ）初代責任者の丸山毅夫は、助手の五條堀孝とともにDNAデータの入力を始めた。研究所内で借りた計算機には電話回線すら接続されていなかったため、データ配布のリクエストがあると磁気テープや8インチフロッピーディスクに書き込んで郵送した。翌春に初めて発行されたニュースレターは、現在、DDBJウェブサイトで閲覧可能となっている。

85年12月、DDBJの本格的な立ち上げを担う宮沢三造が着任した。宮沢は多くの難題に直面した。

入力したデータは、そのままデータベースに収めるわけにはいかない。整合性をチェックしたり、生物学的な注釈を書き加えたりする専門的な人材が必要だ。最新の知識と技術を持つスタッフを迅速に集め、論文業績とは異なる尺度で評価・育成していかなければならない。しかし当時の日本の大学や研究所には、そのようなスタッフのための雇用制度はなかった。技術の進歩が極めて速い分野を支える基盤センターという概念がなかったのだ。

1986年ごろの遺伝研とその周辺＝三島市谷田

さらに、先行する米国とのデータのやり取りにもかなりの手間がかかった。米国の研究機関では主流となっていた計算機システムとの互換性の問題だ。新しい計算機を導入するためには自分で文部省に予算を要求しなければならない。しかも、認められるかどうかは予算要求から半年以上先までわからなかった。

「DDBJの立ち上がりは国際的にも注目されていたが、所内は宮沢さんに対して『お金をとってくるのもあなたの仕事でしょう』という空気だった」と、五條堀は振り返る。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）